

ある晩、私は夢を見た。

西暦二〇〇一(平成十三)年、奥会津地方一帯は「ポスト・モダン社会」の最先端を行くモデル地域として一躍脚光を浴びていた。

一九六〇年代から続いた日本の高度経済成長神話は、一九八九年の株価暴落に始まる複合不況の長期化によって完全に崩壊していた。あの「豊かさ」は、地球資源の浪費による一時的なお祭り騒ぎでしかなく、うたかたの繁栄に過ぎなかったのだ、と皆が反省していた。

森林伐採や化石燃料の枯渇による大気汚染や地球温暖化は一層深刻になり、コンクリートに覆われた都市部は灼熱地獄と化していた。コンクリートのブロックがあちこちでは落ち、その下敷きになった死者も続出した。都市の景観は廃墟そのものだった。木造建築が再評価され始めていたが、もう手遅れだった。騒音公害もひどく、ストレスの蓄積による精神異常者が続出した。「都会はもう住む場所ではない」とだれもが思った。
一方、農山漁村は一九九〇年代の中ごろから過疎化に歯止めがかり、人口は



道化師の夢想

藤森 弘



ゆるやかな上昇カーブを描くようになってきた。森林や水が豊かな農山漁村は、都会に比べて住環境の点では完全に優位に立っていた。清らかな水、さわやかな風、新緑や紅葉が美しい森、新鮮な魚や山菜の料理……。生態系や美しい景観に配慮した調和型の「開発」が進み、就労の場が拡大して若者も帰って来るようになってきた。豊かな自然環境は、高齢者の健康維

一気に高まった。「奥会津に行ってみよう」という観光客は急増した。山肌を削ることを極力避けた全国でも珍しいクロスカントリー型のスキー場が人気を呼んで、四月中旬まで雪が消えない山間の村は全国のスキー愛好者でにぎわった。宅配便を利用した雪ビジネスも始まっていた。断熱ケースに雪と地元の特産品をセットにした「ホワイトクリスマス・

持に抜群の効能を発揮した。「自然と調和して生きる」。それが合言葉だった。私の住む昭和村では、雪を資源にした新しい村づくりが進んでいた。有志が奥会津一帯の町村や県と協力して創設した「雪国漫画大賞」が全国で評判になり、大賞作品は毎年ベストセラーになった。雪国の暗いイメージは一掃され、「歳時記の郷・奥会津」のブランドイメージは

セット」、雪でチョコレートを包んだ「バレンタイン・セット」、洋酒メーカーと協力して商品化した「雪割りウイスキー」などが人気商品になった。南国の子供たちに雪の美しさや楽しさを味わってもらうことを目的に始めた「雪合戦ツアー」や「雪おろし体験ツアー」も評判になった。豪雪を逆手にとった地域づくりが評価され、国土庁長官賞も受賞した。

また「昭和」という特異な名前を持つ利点を活用した文化事業も全国の評判を呼んだ。村内の昭和の森に「昭和史研究センター」がオープン。全国の昭和史研究者の原稿を編集した定期刊行物を発行し、年に一回は海外の研究者を招いてシンポジウムも開かれた。史的資料が豊富な「昭和史資料館」も人気を呼び、長期滞在型の宿泊施設や研究室、セミナーハウスは学生や研究者でにぎわった。研究者の中には、昭和村に豊かな森林や湿地があることに目をつけて、「地球環境の問題を考える拠点には最適」と、生態系の研究をする者も現れた。キノコや山菜の園類研究に没頭する研究者もいて、一九九七年にはマツタケの人工培養栽培に成功。カスミ草に次ぐ新しい特産品となり、志を持つ若い農業者が次々に入村。二十代の二千万円農家が次々に誕生し、日本の農林業の未来を担う先兵となった。これは夢である。私は世間の失笑をかう道化師かもしれない。しかし、二十一世紀に向けて、奥会津が可能性の宝庫であることは間違いない気がする。
(昭和村喰丸・フリーライター)